年間第十八主日

2018.8.5

ヨハネ 6・24-35

カトリック高円寺教会
主任司祭　吉池好高神父

先週の日曜日の福音は、ヨハネ福音書 6 章のはじめに語られている、五千人を超える大勢の人々がイエスの分け与えてくださった五つのパンと二匹の魚によって、有り余るほどに満たされた奇跡の物語でした。

先週の福音に語られていた出来事の後で、イエスを捜し求めて後を追って来た人々に対して、「あなた方がわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」と今日の福音でイエスは言われます。このおことばが言おうとしていることは、先週わたしたちが聴いた奇跡の物語はそれを実際に体験した人々にとっても、一つのしるしであるということです。更に言えば、イエスが行われたと聖書が語る奇跡の出来事を実際に体験したとしても、その出来事が持つしるしとしての意味を見て取ることが出来なければ、それはそのときだけのこととして終わってしまうということです。奇跡は日々繰り返されることはありません。奇跡を求めるだけでは本当の生きる力を獲得することはできません。このことはわたしたちを当惑させ、落胆させるかもしれません。反省してみると、わたしたちが願い求め、祈り求めていることも、イエスの後を追ったあの人々がイエスに期待していたことと、それほど違うものではないことが多いからです。そのようなわたしたちを、ヨハネ福音書はイエスの奇跡が持つしるしの世界へと招きいれようとしています。事実、ヨハネ福音書はその全編に渡って、奇跡ということばを注意深く避け,その代わりにしるしということばを用いています。聖書に語られている奇跡の出来事が持つ意味を、そのしるし性を読み取ってほしい、それがヨハネ福音書がわたしたちに訴えていることです。このようにしてヨハネ福音書はわたしたちをイエス・キリストへの真の信仰へと導こうとしているのです。

それなら、単なる奇跡願望としての信仰を脱して、ヨハネ福音書が求めているようなイエス・キリストへの真の信仰によって生きるためにはどうすればよいのでしょうか。

先週の福音のパンの奇跡を経験した人々は、イエスを追って自分たちの王としようとしたのです。そのような人々動きを察したイエスは、再び山の中に身を隠されたことが、先週の福音の終わりに語られていました。その先週の福音と今日の福音の間には、一人山に退かれたイエスは、時を経て、弟子たちが乗り組んだ舟の後を追うようにして、湖の上を歩かれ、弟子たちの舟に乗り込ま

れたことが語られています。イエスはこのようにしてガリラヤの湖を渡られたのです。人々がイエスを追い求めて、湖を渡ってその向こう岸で出会ったイエスはこのようなイエスです。けれども、その人々はイエスとその弟子が渡ったようには、本当には湖を渡りきれてはいないのです。

「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」というイエスのおことばは、そのような人々の姿を示しています。イエスを探し求め、真実イエスと出会うためには、この世のパンのみを求め、そのようなパンを与えてくれる王を求める、わたしたちが生きる現実の此岸の淵を越えて、イエスが弟子たちとともに渡られた、信仰の彼岸にイエスの後を追わなければならないのです。

「朽ちる食べ物のためではなく、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」と今日の福音でイエスは語りかけておられます。この世の生を養うためにわたしたちは皆、懸命に働いています。働いても、働いても、この世の生を支えきれない不安にわたしたちは付きまとわれています。

そのようなこの世の生を生きるわたしたちの心に、今日のイエスのこのみことばが意味を持つものとして響き渡るとすれば、それこそが奇跡と呼べることではないでしょうか。「朽ちる食べ物のためではなく、永遠のいのちにいたる食べ物のために働きなさい」。このイエスのみことばがわたしたちの内に衝撃の波紋を広げるとするなら、わたしたちは確実に奇跡を体験しているのです。このような社会の中で今日の福音が招くイエス・キリストのみことばへの信仰をわたしたちのものとすること自体、神のみわざ、神によってもたらされた奇跡としか言いようがない事柄であるのではないでしょうか。わたしたちはそのような、神の恵みとしての信仰の世界に招かれているのです。そしてこの神の恵みによって招き入れられた信仰の世界に生きはじめたときから、わたしたちはこの世の朽ちる生のための食べ物とは別に、永遠のいのちに至る食べ物のあることを知ったのです。永遠のいのちとはこの世の生の果てにわたしたちがあわく夢見る、陽炎のような世界なのではありません。永遠のいのちとは、この世を生きるわたしたち一人ひとりの奥深くに全てのいのちの創造主である神が埋め込んでくださった無限の可能性です。わたしたちが自己のいのちの源である神と相対して向かいあるとき、私のたち内から表れ出る、わたしたちのいのちの真の姿です。

イエスが「わたしはいのちのパンである」と言われるとき、そのいのちとはこのような永遠のいのちであり、イエスご自身,わたしたちがそのいのちを見出し、そのいのちを生きるためのいのちパン、いのちの糧であると言っておられるのです。イエスを信じ、イエスに結ばれ、イエスのいのちのことばがわたし

たちの中に脈打ち始めるとき、わたしたちは永遠のいのちに向かって生き始めるのです。

「わたしはいのちのパンである」と言われるイエスのこの世の生を支えた食べ物とは、イエスが父とお呼びする神のみ旨を行うことであり、イエスの飲む杯とは,父なる神のみ旨としてイエスが受け止められた、イエスの十字架の受難の杯であったことを思い出さねばなりません。

「わたしのもとに来る者は決して飢えることなく、わたしを信じる者は決して乾くことはない」。今日の福音の結びでイエスはこうわたしたちを招いておられます。イエスを信じるとはいのちの交わりのうちにイエスと結ばれることです。イエスが食べ物としたものをわたしたちの食べ物とし、イエスが飲みものとしたものをわたしたちの飲みものとすることによって、わたしたちはイエスとのいのちの交わりに導かれます。そしてそのためにこそ、イエスはわたしたちの食べ物、わたしたちの飲み物となってくださるのです。わたしたちの食べ物、わたしたちの飲みものとなってくださったイエスのいのちに結ばれ、イエスのいのちに生かされて、わたしたちもイエスのように父なる神のみ旨に従って生きて行きたいと思います。この世の生の果実への飢え乾きに悩まされつつも、イエスのいのちと結ばれることによって、それに尽きるのではない、わたしたちのいのちの真の充足を喜び味わう恵みを祈り求めて行きたいと思います。